

第四十四章
突破

第四十章から前章（第四十三章）までのあらすじ

瞬示と真美は巨大コンピュータと交渉するがすぐ戦争を始める人間を非難して譲らない。それどころか無言通信を利用してノイズで人間を屈服させるという。地球に戻ってノイズ攻撃のことを伝えると一太郎がノイズ遮断プログラムの開発にかかる。

ミトとホーリーが前線第四コロニーの五十隻もの戦艦に戦いを挑むが追いつめられてアンドロイドに脱出命令を下すと、敵戦艦の攻撃が停止して戦艦の中央コンピュータ同士の会話が始まる。アンドロイドが戦死したことに疑問を持った中央コンピュータが一斉に説明を求めると巨大コンピュータが絶句する。

この事件を通じてコンピュータやアンドロイドが意思を持ったことを誰もが認める。キャミが巨大コンピュータに先制攻撃を決断したときノイズが流れる。一太郎と花子はノイズ遮断プログラムを完成させたが、ノイズに苦しむ全人類にインストールすることは不可能に近かった。カーンとホーリーとR v 26がノイズの元を断つために宇宙戦艦で前線第四コロニーに向かう。

【時】永久0274年

【空】前線第四コロニー

【人】ホーリー サーチ ミト カーン R v 2 6

「カーン將軍の復活だ」

宇宙戦艦の艦橋に現れた堂々たる若いカーンに、先に生命永遠保持手術を受けたホーリーが思わず叫ぶ。

「茶化すな。それより通信は？」

「通じません。前線第四コロニーは時空間バリアーに包まれています」

「俺たちを意識しているんだ」

ホーリーがカーンからアンドロイドに視線を移す。

「カーン艦長、以前からバリアーを張っています」

「それなら、かなりのエネルギーが必要じゃないか」

「もちろんです。核融合炉のエネルギーでまかっています」

「作戦を確認します」

艦橋のメイン浮遊透過スクリーンに作戦の概略図が映しだされる。カーンのアイデアを下敷きにミトが練りあげた捨て身の戦法だ。まず宇宙戦艦の全主砲を時空間バリアーの一点に集中

第四十四章 突破

させたあとその同じ場所にリモートコントロールで無人の時空間移動装置を時空間移動させる。当然バリアーに阻止されて時空間移動装置は大爆発を起こす。時空間移動中に時空間移動装置が爆発すると大量のエネルギーを放出する。そのエネルギーでバリアーを破壊できれば前線第四コロニーにたやすく時空間移動装置を侵入させることができる。

これは以前、同じ前線第四コロニーで男と女の追跡隊が次々と時空間バリアーにぶつかって、バリアーが破壊されたことをヒントにしてたてられた作戦だ。

「宇宙戦艦に搭載した二百基程度の時空間移動装置でバリアーを破ることができたらどうか」「本来は百基しか積みこめないのを無理して二倍積みこんだのです。それに地球からもミトの命令で百基ほどの時空間移動装置がリモートコントロールでバリアーに突っこむ予定です」

カーンがサブ浮遊透過スクリーンの地球を見つめる。

「ノイズ遮断プログラムのインストール作業にいくらあっても足りない時空間移動装置をミトは都合三百基も用立てしてくれたのか」

ホーリーがカーンに笑顔で応える。

「そうです」

R v 2 6 はこんなときに笑顔を見せるホーリーをふしぎそうに見つめる。

「R v 2 6 の表情が豊かになってきたな。失礼だが……」

ホーリーは背の高いR v 2 6 の顔に手を伸ばしてさわってみる。

第四十四章 突破

「案外、やわらかいんだな」

R v 26も自ら顔をなでる。

「やわらかい？」

警報が鳴り響く。

「ミサイル接近中！」

「なに！」

「球形レーザービーム砲発射！」

宇宙戦艦の周辺で十数回低い爆発音がする。

「敵はバリアーを解除したのか？」

「違います。あれを見てください」

R v 26がメイン浮遊透過スクリーンを指差す。前線第四コロニーのまわりに数えきれない

ほどのミサイルランチャーが見える。

「コロニーの外にミサイルランチャーを配備しているんだ」

「数は？」

「二千基以上あります」

「何という数だ」

「ミサイルランチャーが移動しはじめました」

第四十四章 突破

ホーリーの頭がフル回転する。

「カーン艦長。巨大コンピュータはこれまでとまったく異なる戦法を採用したようです。それに……」

カーンがホーリーの意見をさえぎる。

「どういう戦法だ？」

「前回の戦闘で中央コンピュータやアンドロイドが寝返ったから、機械的な単純な武器で戦おうとしているんです」

「数にものを言わそうとしているのか」

「それだけではありません。レーザー光線発射ランチャーではなくミサイルランチャーで対抗しようとしている。レーザー光線発射ランチャーの方が強力ですが、外れたれレーザー光線が誤って地球に向かうのを考慮している。つまり、地球を無傷で手に入れたいのです」

「わかった。よし！すべて破壊しろ」

カーンの声が艦橋に響く。

「主砲発射準備よし！自動照準確定！バリアー解除」

「発射！」

「ミサイル接近中」

「バリアーを張れ！」

ミサイルがバリアーに引っかかって戦艦の周辺で低い爆発音をする。

「ミサイルランチャーの約二パーセントを破壊した模様」

「巨大コンピュータが作った攻撃システムにしてはちやちだな」

「油断するな」

カーンがホーリーを引きしめる。

「次のミサイルの接近確認」

アンドロイドのきびきびとした応答が艦橋に響く。

「これではバリアーを解除して攻撃できない」

「それより、バリアーが保つかない」

「数が多すぎる」

「先を越された」

ホーリーが悔しがる。

「蛇行しろ。バリアーを張らずに球形レーザービーム砲で対処する方がよかったのか？」

「いいえ、数が多すぎて球形レーザービーム砲では対処できません」

「できるだけミサイルがバリアーにかからないようにするしか、ほかに手はない」

カーンの言葉を受けてR v 26の大きな声がする。

「全速蛇行続行！」

第四十四章 突破

「バリアーをしたままでは主砲を発射できないばかりか、空間移動もできない」

「ミサイルの在庫がなくなるまで我慢するしかないのか」

ホーリーはカーンの言うとおり、とてつもなく手強い相手だと認識する。

「ミサイルの到達の間隔が十秒以上あれば、バリアーを解除して数秒間主砲を連射できないことはない。艦長を命令を！」

カーンがホーリーの提案に大きくうなづく。

「測敵開始」

R v 2 6 がすぐさま指示を実行する。

「五十三秒後に九秒間ミサイル攻撃の間隔が開きます」

「主砲発射の準備にかかれ。やるしかない！」

R v 2 6 に命令するとホーリーを見つめる。カーンはホーリーがそばにいてくれてよかったとしみじみと感じる。ホーリーは副官あるいは副艦長として起用すると最も実力を発揮する。

ホーリーの作戦がすぐに効果をあげる。ミサイルランチャーの数が減るにつれ、逆に宇宙戦艦の攻撃の回数が増えていく。

「あと一息だ。油断するな」

カーンの声が響く。アンドロイドの反応がさらに向上する。カーンもホーリーも十分に手応えを感じる。ひよっとしたら一隻で攻撃を仕掛けたのが正解だったのかもしれない。もし五十

隻もの戦艦を引きつれて戦いに望めば、とっさにこのような戦法が実行できたかどうか疑問だとカーンは考える。しかし、本格的な戦闘はこれからだ。

「全ミサイルランチャーを破壊！」

アンドロイドから歓声があがる。カーンもホーリーも一瞬耳を疑う。

「エネルギーがまもなく底をつきます」

「地球連邦軍司令部、応答せよ」

カーンがミトを呼びだす。

「こちら地球連邦軍司令部。ミトだ」

「ミト、エネルギーの充填じゅうてんを頼む」

「了解」

「こちらはまだ無事に戦いを続けているが、そちらはどうだ」

「アンドロイドのめざましい活躍でなんとかなりそうだが、死者が続出している」

ミトの声はあくまでも冷静だが、事態が好転している状況ではなさそうだ。宇宙戦艦がわずかに揺れる。地球からエネルギーがマイクロウェーブで送られてきた。

「前線第四コロニーのバリアーが解除されました！何か仕掛けてきます」

今までにないアンドロイドの素早い反応だ。

「エネルギー充じゅうてん填中止。全速前進！いや、前線第四コロニー手前に空間移動せよ！ぶつから

第四十四章 突破

ないように用心しろ」

アンドロイドの手足が忙しく動く。

「強力なレーザー光線が向かってきます」

宇宙戦艦のまわりが急に明るくなるのと、戦艦がその場から消えるのがほぼ同時だった。宇宙戦艦の目の前に前線第四コロニーが現れる。というより前線第四コロニーのすぐ近くに宇宙戦艦が空間移動したのだ。

「全砲門発射！」

宇宙戦艦の全主砲が前線第四コロニーに向かって発射される。

「バリアーが張りめぐらされる前に到達してくれ」

カーンは祈るようにメイン浮遊透過スクリーンを見つめる。主砲のレーザー光線が前線第四コロニーのシュルターの手前ではじき飛ばされる。

「惜しい！」

カーンが床を二、三度踏みつける。

「同じ場所に全主砲を集中して撃ち続ける。全エネルギーがつかまるまで」

再び主砲が発射される。

「距離をつめろ！」

若くなつたカーンは巨体を震わせながら次々と命令を下す。R v 2 6 の中継なしにアンドロ

第四十四章 突破

イドがカーンの命令を的確にこなす。

「時空間移動装置、発進準備！」

「エネルギー低下」

「第二連装から第五連装までの主砲打ち方やめい！第一連装の主砲にエネルギーを集中しろ！」

眼下の前線第四コロニーのはるか彼方に地球が青く光っている。宇宙戦艦がわずかに揺れる。

「地球からエネルギーが送られてきました」

「よし！エネルギー回路を全主砲に直結しろ！」

「直結完了！」

五連装十五門すべての主砲が火を噴く。

「時空間移動装置を順次、時空間移動させる」

「格納室！準備は？」

「二十基、時空間移動完了。次の二十基準備中」

「間隔をつめろ」

ホーリーがここでミトに無言通信を送る。

「攻撃地点の座標に向けて地球からも時空間移動装置を発進させてくれ」

「了解！第一陣の時空間移動装置、発進！」

第四十四章 突破

力強いミトの無言通信がホーリーの頭に響く。

主砲の集中攻撃でバリアーの一角が赤味を帯びて輝く。次々と時空間移動装置が時空間移動して、赤く輝く地点で大爆発を起こす。しかし、バリアーはびくともしない。爆発の振動が宇宙戦艦に伝わってくる。

「残り四十基。二十基時空間移動開始！」

ホーリーが時空間移動室に向かうために艦橋を出る。

「頼むぞ！」

カーンの力強い期待がホーリーの背中に突きささる。

「私も行きます！」

Rv26がホーリーのあとを追う。すごいスピードだ。以前のRv26とはまったく違う動作だ。メイン浮遊透過スクリーンではそれまで赤味がかっていた透明のバリアーの一部がまぶしく輝きだす。

「最後の二十基です」

最後の時空間移動装置がバリアーに突っこむ。休むことなく主砲はレーザー光線をはきだす。「だめか」

カーンが息を止めて目元をピクピクさせてメイン浮遊透過スクリーンを見つめる。

「第四連装、第五連装の主砲打ち方やめい！艦首をあの地点に突入させる！」

第四十四章 突破

艦首を前線第四コロニーに向けると三連装計九本の主砲がなおもレーザー光線をはき続ける。「カーン、準備完了」

ホーリーの声が艦橋のスピーカーから流れる。

「まだまだ！待機。ショックに備えろ！」

宇宙戦艦の艦首がバリアーにめりこむように激突する。次の瞬間、目もくらむような強烈な輝きを伴って艦首が跡形もなく吹つとぶ。同時にバリアーが消滅する。

「今だ！」

カーンが叫ぶ。二十基の時空間移動装置が前線第四コロニーのシエルターの内側に現れる。

カーンはそれをメイン浮遊透過スクリーンで確認すると地球連邦政府に送信する。

「侵入成功！」

カーンがそう言い終わるのを待っていたかのように宇宙戦艦が大爆発を起こす。

「アンドロイド同士が戦うことになる」

ホーリーがRv26の時空間移動装置に連絡を取る。

「了解しています」

Rv26から力強い返事が戻ってくる。

「どのようにして巨大コンピュータを破壊するかだ」

「このまま時空間移動装置で巨大コンピュータルームに行くのは危険です」

「巨大コンピュータに会いに来たんじやないものな。巨大コンピュータは膨大なエネルギーを消費しているはずだ。核融合炉を破壊すれば」

「あそこは警備がきびしすぎます」

「よし、主電源装置を破壊しよう」

R v 2 6 から返事がない。ホーリーが不安になって叫ぶ。

「どうした！」

少し遅れてR v 2 6 の弱々しい声がスピーカーから流れる。

「カーン艦長からの通信が途絶えました」

「！」

瞬間的にすべてを理解したホーリーは両手の拳こぶしにありつただけの力をこめて震わせる。

「カーン、素晴らしい艦長だった」

「たった一隻の戦艦でここまで戦えるとはワタシの演算範囲をはるかに超えています」

R v 2 6 の感心した声をさえぎってホーリーがつぶやく。

「カーンだからこそできた」

「やってみなければわからないということですか」

「やるぞ！ R v 2 6」

第四十四章 突破

「手動で主電源装置室に移動します。着いてきてください」

「わかった。頼むぞ」

ホーリーたちの時空間移動装置が現れた場所は戦闘艦やフリゲートの格納室だ。誰もいない。時空間移動装置のドアが跳ねあがるとホーリー、Rv26や武装したアンドロイドが次々と降り立つ。

「ここは主電源装置室ではないぞ」

ホーリーがRv26をにらみつける。

「巨大コンピュータをだますためウソを言ったのです。時空間移動装置間の、そしてアンドロイド同士の通信はつつぬけです」

ホーリーはただひたすらRv26の大きな背中についていく。階段を上ったりいくつかのドアをくぐり抜けたところは見覚えのある広い空間だ。ここは旗艦セント・テラの艦橋。

「旧式ですが現役の戦闘艦として十分戦えます」

Rv26が自ら操縦席に座る。旗艦セント・テラが生き返ったように振動しはじめる。

「すべての電源オン。発進します」

格納室の天井が大きく開く。セント・テラがゆっくりと上昇を開始する。

「すごい！立派に動くじゃないか」

ホーリーが再びRv26の肩をたたく。

第四十四章 突破

「R v 26、このセント・テラで主電源装置を破壊するのか？」

「いいえ、直接巨大コンピュータを攻撃します」

ホーリーがR v 26の肩をポーンとたたく。

「任せる。ここはR v 26のふるさだからな」

R v 26が肩を落として目を閉じる。

「どうした」

「ワタシは初めてウソをついたアンドロイドになるのが残念です」

「これでR v 26は人間の仲間になったわけだ」

「人間の仲間になるためにはウソをつかなければならないのですか」

ホーリーがいつもの人なつこい表情をR v 26に向ける。

「R v 26がウソつきアンドロイドの第一号として永遠に名声が残るように一肌脱ぐぞ」

「あまり名譽なことではありませんが、わかりました」

セント・テラが天井に近づくと急に格納室が騒がしくなる。どこから現れたのかアンドロイドが格別驚いた様子を見せることなく淡々とフリゲートに乗りこむ。開いていた格納室の天井が閉まりはじめる。

「急げ！」

「急上昇は危険です」

急上昇するとシェルターにぶつかる恐れがある。

「間に合うか」

セント・テラの艦橋が格納室の天井からはみ出す。閉まりかけた天井の一部が甲板に迫る。セント・テラが少し傾く。艦首が天井に引っかかるが、かまわず上昇を続ける。天井が持ちあがるように大きく曲がる。バリバリという大きな音がして一部がくずれる。何とかセント・テラは格納室から離脱する。

「後部主砲は追っ手のフリゲートが格納室から出てきたところを狙え」

「その必要はありません。格納室の天井が閉じました」

「開けっ放しにしておけばよかったものを。よし！巨大コンピュータを攻撃する」

格納室の天井が再び開かれようとするが、損傷したところが引っかかるのか少し開いただけで動きが止まる。

「ありがたい。追っ手を気にしなくて済む」

「ホーリーが敵失を歓迎する。」

セント・テラは要塞のような丘に近づくと浮かんだまま停船する。

「全砲門を開け。標的はあの丘だ」

ホーリーが百人足らずのアンドロイドを引きつけて、戦艦ほどの強力な主砲は積んでいないがセント・テラという準戦艦級の戦闘艦で真っ向から巨大コンピュータに戦いを挑む。

「発射！」

太いレーザー光線が大きな丘に打ちこまれる。丘は吹つとんで巨大なシエルターに無数のヒビが走る。シエルターは外からの攻撃には強いが、内側からの攻撃にはもろい。

「衝撃に備えろ！」

シエルターが破裂するように粉々に割れる。飛び散った岩石が勢いよく前線第四コロニーの上空に飛びだす。

「踏みとどまれ」

真空の宇宙に放りだされまいとセント・テラは船首を地表に向けてエンジンを全開する。

「体勢を立てなおして第二次攻撃の準備をしろ」

R v 26 がセント・テラを水平に安定させると主砲の照準を合わせる。

「舞いあがった岩石が落ちてくる前に攻撃する」

すでに小さな岩石がセント・テラの艦体にコツコツと音をたててぶつかる。

「第二次攻撃開始」

再び主砲から太いレーザー光線が半分以上破壊された丘陵部分に打ちこまれる。ホーリーは息を殺してレーザー光線の行方を見守る。大きな爆発音がするはずだがシエルターが破壊されて空気がないから何も聞こえない。しかも砂塵さじんでよく見えない。しばらくすると紫色に輝くものが現れる。

第四十四章 突破

「あれは何だ？」

巨大な球形の物体がゆっくりと上昇する。ホーリーには丘そのものが上昇しているように見える。

「三次攻撃の準備！」

ホーリーが生唾なまつばをのみこむ。

「あれは！まるで時空間移動装置のお化けのようだ！」

ホーリーは巨大な紫色の球体を見て直感的な言葉をはく。そしてすぐにこの球体の中に巨大コンピュータが格納されていると確信する。それにしても大きな球体だ。直径二、三キロメートルはあるのかという球体だ。その紫色の球体がゆっくりと回転を始める。

「撃て！撃ちまくれ！」

ホーリーの命令がとどろく。巨大な球体の回転がまたたく間に速くなる。セント・テラの主砲が白い火を噴く。レーザー光線が高速回転に達した巨大な紫色の球体を捕らえる。しかし、その光線ははじかれるようにあらゆる方向に散らされる。散乱したうちの一本のレーザー光線がセント・テラに戻ってきて艦尾に命中すると爆発する。セント・テラは大きく傾いて横向きに落ちていく。高度が低かったため地表に激突することはなく、地面を数千メートルほど土煙をあげながら這うようにして停止する。

「大丈夫ですか」

R v 26 が座席から放りだされてうずくまるホーリーのそばに手をついてのぞきこむ。

「大丈夫だ。被害は？」

ホーリーはうめきながらも状況を把握しようとする。

「艦尾が完全に破壊され、航行不能です」

「時空間移動装置の格納室へ行くぞ」

R v 26 がホーリーに肩を貸そうとする。そのとき誰かが叫ぶ。

「敵フリゲートがこちらに近づいてきます」

「距離は？」

格納室のこわれた天井を修復してフリゲートがセント・テラを追跡してきたのだ。

「すでに敵の照準が本艦をロックしました」

「主砲は使えるか」

「全門使用不能です」

「これまでか」

ホーリーがR v 26 に向かって「すまない」と言ってから頭を下げる。そして顔をあげてR v 26 を見つめる。

「最後の仕事だ。ノイズ遮断プログラムをアンインストールしてくれ」

R v 26 はホーリーに言われたとおり肩から素早く髪の毛のような細かいケーブルを引きだし

第四十四章 突破

てホーリーの頭に埋めこまれた無言通信チップの端子に差しこみ、一太郎が開発したノイズ遮断プログラムをアンインストールする。そのとき艦内の照明がすべて消える。

ホーリーはすぐさまサーチに無言通信を試みる。サーチの無言通信が返ってくるまでに雑音が混じっていないかじつと耳を澄ます。

「ノイズが消えている！」

ホーリーはRv26の肩を借りて立ちあがって大きな声を出して笑う。暗いがRv26にはホーリーの笑顔が引きつっているように見える。あばら骨が折れているらしく、骨の一部が腹部を突き破っている。ふしぎなことに出血はない。生命永遠保持機能がホーリーの身体を何とか支えている。

「ノイズの発信源の破壊に成功したようだ」

Rv26がホーリーをふしぎそうに見ながら、近くにいたアンドロイドに向かって叫ぶ。

「回復剤を持ってこい！」

「ありがとう、Rv26。作戦は成功した」

「でも、ワレワレはフリゲートの攻撃を受けます」

横倒しのセント・テラの艦橋の窓から集結したフリゲートの主砲がセント・テラに向けられているのがよく見える。

「白旗でも振ってみるか」

第四十四章 突破

R v 26 がホーリーをしげしげと見つめる。

「ホーリー！」

やっとサーチからの無言通信が入る。

「さっき、ノイズが消えたわ」

「よかった。すぐ反撃開始だ！」

「わかったわ」

いつの間にかフリゲートの主砲がセント・テラからはるか彼方に向けられているのにホーリーも R v 26 も気が付かない。

「ホーリー、ホーリー」

返事がないのでサーチから無言通信が断続的に送られてくる。

「ミリンを頼む」

「ホーリー！」

サーチから強烈な無言通信がホーリーの頭をゆさぶる。ホーリーは無言通信を切る。

第四十五章
宇宙海賊

【時】 永久0274年

【空】 ブラックシャーク

【人】 ホーリー フォルダー イリ R v 2 6

* * *

R v 2 6 がホーリーの肩を強くたたく。

「痛いじゃないか……」

「あれを見てください！」

艦橋の窓からフリゲートが離れていくのが見える。そしてその向こうに緑色の渦巻きのようなものがフリゲートに近づいてくる。

「時間島？」

渦巻きの中から黒いごま粒のようなものが現れてどんどんと大きくなって迫ってくる。

フリゲートからレーザー光線が次々と黒い物体に発射される。黒い物体からもレーザー光線が正確にフリゲートに向かって発射される。フリゲートは全艦粉々に破壊される。黒い物体からはなおもレーザー光線が発射される。その光線はまっすぐ巨大な紫色の球体に向かう。その

レーザー光線が到達する前に、フツと巨大な紫色の球体の姿が消える。時空間移動したのだ。「まさか！いや、やっぱりあの球体は時空間移動装置だ。あんな大きな時空間移動装置があるなんて信じられない。」

時空間移動装置はその運動性能上、直径せいぜい五、六メートルが限界だ。ホーリーが驚くものも無理はない。巨大コンピュータが格納されているはずの巨大な紫色の球体の直径は数キロメートルはある。単位が違う。

もちろん、巨大な時空間移動装置など存在するはずがない。ホーリーは巨大コンピュータが時間島を操ることができるという瞬示と真美からの話を忘れていた。それより、ホーリーの心は黒い物体に向かう。

いつの間にか緑色の渦巻きが消えて黒い物体がセント・テラに迫る。戦艦ほど大きくはないが、セント・テラよりは少し大きめで真っ黒な宇宙戦艦のようにも見える。真っ黒というより黒光りしている。

——ひょっとして

ホーリーがそばにいないはずのRv26に叫ぶ。

「あの黒い宇宙戦艦とコンタクトを取りたい！」

暗闇の中、ホーリーがRv26からマイクを受けとる。

「おーい！フォルダー！聞こえるか！ホーリーだ」

返事がない。ホーリーはもう一度マイクの先端に息を吹きかけて口を付ける。そのときスピーカーからなつかしい声がもれる。

「ホーリー、久しぶりだな」

「やっぱり！フォルダーか」

「苦戦しているようだな。誰と戦っている？キャミか？」

「違う。巨大コンピュータだ」

「なに？巨大コンピュータ？まあ、誰でもいい。ちょうどいい。渡したいものがある」

「渡したいもの？」

フォルダーからの通信が途絶える。前線第四コロニーに地球から続々と宇宙戦艦が空間移動してくる。ホーリーはフォルダーの通信が途絶えた理由を理解する。そしてフォルダーが通信内容を傍受できるように、無言通信を使わずにマイクでミトを呼ぶ。

「ミト、聞こえるか」

「ミトだ」

「黒い宇宙戦艦を攻撃するな。俺を助けてくれた命の恩人だ」

「あれは？」

「宇宙海賊だ」

「なに！あの宇宙海賊か！」

「とにかく攻撃するな。攻撃するなら俺は宇宙海賊の人質になる」

「ホーリー！」

サーチからの無言通信が入る。

「サーチ、安心してくれ。何とか助かった。宇宙海賊のお陰だ。ミトを説得してくれ。今は大事な味方だ」

ホーリーは全身を走る激痛を無視してサーチをうながす。

「わかったわ！」

ホーリーが再びフォルダーとの通信回路を開く。

「フォルダー、今、地球連邦軍を説得中だ」

「ホーリー、感謝する。いくら俺でも五〇隻近い戦艦とは戦いたくない」

「そちらに行く」

ホーリーはRv26に背負われて時空間移動装置の格納室に向かう。

「Rv26はここに残ってくれ。彼らを刺激したくない」

「わかりました」

Rv26はいつの間にか手にした回復剤をやっとホーリーに手渡す。

「ホーリー！どうした！」

黒い戦闘服に身を包んだがっちりとした体格のフォルダーが時空間移動装置から倒れるように出てきたホーリーを支える。

「大丈夫だ。ただの急性腹膜炎だ」

「何を言ってるんだ。肋骨が折れて腹から出ているじゃないか。イリ、手術の準備だ！」

フォルダーの声が時空間移動装置の格納室に響く。すぐさまホーリーは担架に乗せられて手術室に向かう。

「フォルダー、ありがとう。本当にありがとう。まさか、おまえに助けられるなんて……」

ホーリーがタンカの上で言葉をつまらせる。

「しゃべるな。だが、おまえを助けに来たわけではない」

フォルダーはホーリーがしっかりとピンを握りしめているのに気が付く。

「回復剤を飲んだのか」

「さっき飲んだところだ。それより渡したいものとは？」

「しゃべるな！」

手術室のドアがスライドして開く。

「イリ、俺の親友だ。頼むぞ」

「こんな我慢強い人間は見たことがないわ」

身体にフィットした白衣に身を包んだ細身の女が海賊にホーリーをベッドに寝かせるよう指

示する。そして電磁ハサミでホーリーの上半身の戦闘服を器用に切っていく。ホーリーはすぐさま丸裸にされる。

「どこが、ただの腹痛なの」

イリがあきれてホーリーの顔をのぞく。

「絶望のふちでシリモチをついただけさ」

さすがのホーリーも目を閉じて動かなくなる。

「あれを持ってこい」

上半身をギプスで固定されたホーリーがフォルダーに支えられながらジワツと椅子いすに腰かける。ふたりの海賊が大事そうに金属製の箱をホーリーの前に置くと扉を開ける。

「これは！」

箱の中にはアヒルより少し大きい埴輪はにわの鳥が二羽入っている。

「知っているのか」

「正体は知らないが、見たことがある」

「土でできたこの奇妙な鳥が信号を出すことはどうだ？」

「信号を？」

ホーリーの視線がフォルダーの視線と合流する。

「中央コンピュータが解析した。その信号はある時空間の座標だった。しかし、ここに来るまでその座標が地球の近辺で前線第四コロニーだということはまったくわからなかった」

ホーリーに活力が戻ってきたのを見計らって、フォルダーがいきさつを話しはじめる。

空間移動を終えた宇宙海賊船ブラックシャークが奇妙な空間に向かって惰性で近づく。

「あれは完成コロニーです」

フォルダーがメイン浮遊透過スクリーンを見ながら、操縦士の言葉に疑問を呈する。

「なぜ完成コロニーがこんなにたくさん集まっているんだ」

「わかりません」

「生命反応がまったくないわ」

イリがフォルダーに近づきながら報告する。

「何だ、あれは」

薄い黄色の細長いものが七本見える。完成コロニーをここへ集めた時間島が目的を失ったかのようにたるとんだヒモのようになって漂っている。フォルダーにはそれが時間島であることなど知るよしもない。

「どの完成コロニーでもいい。降りてみよう」

ブラックシャークの船尾が一瞬輝くと一番近い完成コロニーに向かう。そのとき急に緑色の

強力な光がブラックシャークの前を通りすぎて、同じ完成コロニーに向かう。

「何だ！」

「エネルギーのない光線です」

「驚かしやがる」

フォルダーがイリを見つめながら大声を出す。

「戦闘配置につけ！」

イリが計測レーダー装置の前に向かう。

「何かある。少しでも変わったことがあればすべて報告しろ」

イリが軽くうなづく。

「緑の光線が完成コロニーに到達しました」

「どこから現れた？」

イリが首を横に振る。

「ほかの時空間から突然出現したようだわ」

「到達点に向かえ！」

ブラックシャークが完成コロニーとの距離をつめる。

「依然、生体反応はありません」

「まもなく完成コロニーの地表が肉眼で見えるはずだわ」

メイン浮遊透過スクリーンが茶色の画面に変わる。すぐに焦点が合う。

「待て、少し手前に戻せ！」

メイン浮遊透過スクリーンをながめるフォルダーがイリに大きな声を投げつける。

「そこだ。ズームアップしろ」

目の前のモニターを見るイリとメイン浮遊透過スクリーンを見るフォルダーの視点が一致する。

「鳥？」

「生体反応がありません」

「接近しろ」

「鳥のような形をしている」

完成コロニーの地上わずか数メートルほど上で停船したブラックシャークの船底からロボットアームが現れるとふたつの埴輪はこわの鳥をつかみあげる。

「分析装置に入れる。こんなもの見たこともないな」

「チューちゃんにわかるかしら」

イリはブラックシャークの中央コンピュータのことをチューちゃんと呼んでいる。

「俺たちのコンピュータはオンボロだからなあ」

分析装置は中央コンピュータに直結されている。

「ゴホン、危険な兆候はありません」

フォルダーとイリがメイン浮遊透過スクリーンに大写しされた埴輪はにわの鳥を見つめる。

「コンピュータのクセにせき払いをしやがる」

「鳥インフルエンザに感染したのかもしれない」

「バカなことを言うな」

「成分は土です。鳥型の埴輪はにわです」

フォルダーに替わってイリが中央コンピュータをうながす。

「もう少し科学的に説明できないの」

「科学的に説明してもフォルダーには理解してもらえません」

「何という屁理屈コンピュータなんだ。おまえは」

「ところでハニワってなんなの」

「土で作った人形です。いいえ、鳥です」

「ハニワのことを聞いているのよ」

「古代、人間が作ったおもちゃです」

「おもちゃ？どおりでカワイイと思ったわ」

イリが表情をゆるめる。フォルダーには少しもカワイクは見えない。

「この程度の説明では満足しませんか」

「当たり前だろ」

「頭が痛くなるのを覚悟しますか」

「わかった。先に降参する。説明はいい。それよりこの完成コロニーになぜこんなものがあるんだ。さっきの緑の光線との関係は？」

「それがわかっていたら先に説明しています」

「わからんということか」

「そうです」

「役にたたんコンピュータだ。先に降参しなければよかった」

「とても羽ばたいて飛んできたとは思えないわね」

イリは中央コンピュータにからかわれているフォルダーから再びメイン浮遊透過スクリーンの埴輪はにわの鳥を見つめる。

「重大なお知らせがあります」

コンピュータの声にイリは驚きの声をあげる。

「泣いているわ」

埴輪はにわの鳥の両目から緑色の涙があふれている。フォルダーも目をこすって埴輪はにわの鳥を見つめる。

「水分を含んでは言っていないぞ」

「だから重大なお知らせがあると言っているのです」

「早く言え」

「この二羽の埴輪はにわの鳥から信号が発信されてます」

「何を！」

「やさしく説明できません」

「むずかしくてもいいから説明しろ」

「この鳥の内部の土の一粒一粒がほんの少しずつ動いて微弱な信号を出しています。それは複雑な数字で、分析の結果、その数字はある地点の時空間座標を示しています」

「その座標を分析しろ」

「チューちゃん、この涙は何なの」

「同時にふたつの命令を受けることができません」

「わかった。先に座標の分析だ」

「分析不能です」

「涙は」

「ある時空間座標を示す信号です」

「涙が信号?!」

フォルダーの話が終わる。

「とういわけで何かの因縁だ。この埴輪はにわの鳥を優秀な地球の中央コンピュータで分析してくれないか」

「涙が信号だったのか……」

「気分はどうだ？」

フォルダーが心配そうにホーリーを見つめるが、ホーリーはギプスの上から骨折したあたりをさわりながら笑顔で応える。

「もう大丈夫だ。ところでここへはどうやって移動してきた」

「さっきも言ったように、この埴輪はにわの鳥の涙を頼りに移動した」

「そうだったな」

「コンピュータが解析した座標に時空間移動すると決定したときに、船首方向で緑色に輝くものが現れて渦を巻きはじめたんだ」

「その緑色の物体に包まれはしなかったか」

「いや、その渦巻きを中心に目印にして追尾していくうちに時空間座標のデータが蓄積されて時空間移動した」

——ブラックシャークは時空間移動船なんだ！

ホーリーがすぐに確認する。

「ブラックシャーク自体が時空間移動したのか」

「そうだ。時空間移動自体は別に異常なものではなく、いつもどおりだった。ただ、中央コンピュータは時空間移動ではなく次元移動だとかわけのわからんことを言っていて興奮していたが」

ホーリーはブラックシャークが時間島で移動してきたと思っていたが、次元移動という言葉に気を止めることなく、どうやら思い過ぎのようだと言っていると単純に解釈する。

「かなり遠くに地球が見えるところに時空間移動してきた。再び船首前方に緑色の渦巻きが見えたので再びそれを追跡したら、この前線第四コロニーにたどり着いた。緑色の渦巻きは数手に分散してほとんどがホーリーが乗っていた戦艦を攻撃しようとしているフリゲート、それに一筋の緑の光線が紫色の巨大な丸い物体に吸収されるように消えてしまった。そのとき俺たちのオンボロコンピュータが攻撃の指示を出したんだ。久しぶりの戦闘でしびれたぜ」

「そうか。重ねて礼を言う」

「しかし、ホーリーに会えるとは思ってもいなかった」

イリがフォルダーにたずねる。

「ホーリーとはどこで知りあったの」

「あっそうか。紹介していなかったな。ホーリーは学生時代の悪友だ」

「そうなんです」

ホーリーははいねいにイリに頭を下げながら言葉を続ける。

「そう言えばついこの間、おまえのうわさをしていたところだった」

「ところで、おまえたちの戦争はどうなったんだ。完成コロニーは全部もぬけの殻になっていった」

「それに一ヶ所に集まっていたわ」

イリが付け加える。

「戦争は終わった。今は仲良くやっている」

「信じられないわ。あんなに憎しみあっていたのに」

「話せば長い。フォルダー、もう海賊をする理由がなくなってしまったぞ。人類は地球にしかない。地球を襲って略奪するのか」

「それが本当なら、海賊業を続ける理由はないな」

「地球で暮らすつもりはないか」

意外なホーリーの誘いにフォルダーとイリが考えこむ。

「ゆっくりと酒でも飲まないか。昔のように」

ホーリーがうれしそうに笑うとフォルダーもニヤツと笑う。

「陸おかに上がるのはもう少し先にする」

「そうか、残念だ」

「これからどうするんだ」

「あの取り逃がした巨大な丸いものを追いかけてみる」

「あれは前線第四コロニーの巨大コンピュータだ」

「前線第四コロニー……ノロ……」

フォルダーが言葉をいったん止めてから言いなおす。

「人類が造った史上最強の量子コンピュータと言われているものだな」

「しかも、意思を持っている」

フォルダーもイリもホーリーの言葉に驚くことなく笑いだす。

「意思を持ったコンピュータか。それなら余計に勝負したくなるな」

「とても危険な存在だ」

ホーリーが真顔でフォルダーを牽制する。

「人類はあの巨大コンピュータにもう少して滅ぼされそうになったんだ。そこをフォルダーが

助けてくれた」

フォルダーが誰に向かうとでもなく大声をあげる。

「聞いたか、意思を持ったコンピュータが現れたらしいぞ」

「是非、勝負したいものです」

ホーリーが目を丸くしてその声がする天井に顔を向ける。

「誰なんだ」

「ゴホン、ワタシはブラックシャークの中央コンピュータです」

「回線がおかしくなったのか」

「いいえ、風邪気味なのです。新型のインフルエンザかもしれません」

ホーリーがフォルダーに向かって右手を大きく振る。

「悪い冗談はやめてくれ」

フォルダーがホーリーの耳元でささやく。

「ときどき頭がおかしくなるのが欠点だが、肝心なときには結構、役にたつコンピュータだ」

「また悪口を言っているのですか」

第四十六章
火炎土器

【時】 永久0274年

【空】 考古学研究所（リンメイの研究室） 羅生門

【人】 ホーリー サーチ ミリン ケンタ ミト キヤミ 住職 リンメイ 一太郎 花子

「何の変哲へんてつもない埴輪はにわの鳥だわ」

考古学研究所でリンメイはホーリーがフォルダーから譲り受けた埴輪はにわの鳥を分析したが、手掛かりは何もない。

「あの埴輪はにわの鳥とは違うのかしら」

リンメイと住職が以前宇宙戦艦の工場で埴輪はにわの鳥の涙を分析したことを思い出す。

「涙が信号じゃといわれてもわたしにはよくわからん。フォルダーに担がれているのじゃ？」

「そんなことはないでしょう」

「じゃが、あの涙はホルモン的一种じゃとか言っていたな」

「ホルモンは生物の身体に信号を送るのよ。でも信号の性格が違いすぎるわ。それに埴輪はにわの中の土の微妙な動きで信号を出すなんてとても考えられないわ」

「しかし、通信というものは基本的には電子の動きです。土の分子の中の、原子の中の、電子が何らかの刺激で信号を発するというのは十分に考えられることです」

一 太郎が落胆するリンメイを支えるようにしっかりと告げる。花子がリンメイの部屋に無造作に置かれた数々の埴輪はにわや土器を一つひとつをていねいに見つめる。

「いつも思うのですが、誰がいったい何のためにこんなものを作ったのかしら。何に使うのかさっぱり見当がつかないわ」

「そうだな、中国の古墳から出土するものはそれなりにある程度理屈がつくものばかりなのに、日本の古墳から出土するものは意味がよくわからないものが多い」

一 太郎が慎重に火炎土器を手にすると、リンメイが一太郎に説明する。

「それは古墳から出土したものではありません。一太郎の世界の縄文時代のもんです」

「勉強不足で申し訳ありません。でも物を入れる器としては合理的じゃないな」

一 太郎が火炎土器を上からのぞいて首を傾げる。

「リンメイの世界では火炎土器はないのですか？」

「この世界ほどではありませんが、少ししか発見されていません」

一 太郎が一息つくと思いついたように言葉が続ける。

「瞬示はどこにいるんだろう」

花子も真美のことを思い出す。

「あのふたりを最後に見たのはキャミ、カーン、ミト、五郎で会議の途中でノイズに犯されたときに消えたらしいわ」

「巨大コンピュータのところへ向かったというのが、みんなの一致した見方じゃ」

住職の言葉に花子が急に涙をこぼす。

「生きているのかしら」

「巨大コンピュータのところに行って何らかの成果をあげたとすれば、巨大コンピュータからのノイズによる攻撃は停止していたはずじゃ」

「あのふたりにもかなわなない敵があつた巨大コンピュータだとすれば、恐ろしい存在だ」

一太郎はあくまでも冷静に判断する。

「しかし、カーンとホーリーが生身の人間が何とか巨大コンピュータを追っばらつたということとは誠にあつぱれじゃ」

「あのふたりはひよつとして戦う前に、例えば幽閉されてしまったのかもしれない。あれだけの超能力を持つふたりを巨大コンピュータが何らかの方法で手も足も出ないようにしたのかもしれない」

しかし、一太郎は希望を捨てていない。自分をなぐさめるように言葉を続ける。

「何があつたにせよ、どこかにいるに違いない」

「とにかく、私たちはこの埴輪はにわの鳥はもちろんのこと、巨大コンピュータが狙ねらっていた遮光器

土偶の謎に迫らなければならぬわ」

リンメイが気を取りなおす。そのリンメイに一太郎が素直にうなずく。

「わかりました。今日はこれぐらいにして、続きは明日あしたにしよう」

「明日あす、カーンの葬式があるわ」

リンメイが住職に近づく。

「カーンは見事な働きをしたそうじゃ。カーンの信じていた宗教が仏教だったら、わしの手で丁重に法会を営むのじゃが」

住職がリンメイの背中に手を回してドアの方に歩きだす。一太郎も花子の手を取って住職とリンメイに続く。電気が消されドアにロックがかかる。

真つ暗な部屋の中で火炎土器が赤く輝きだす。

葬儀会場をあとにするとキヤミがリンメイに提案する。

「カーンの死を無駄にしないためにも、巨大コンピュータが地球を占領してまで解き明かそうとした遮光器土偶の謎に迫らなければならぬわ」

リンメイがキヤミに首を横に振る。

「でも、詳細なデータはすべて巨大コンピュータが握っているわ」

「確かにあらゆるデータを巨大コンピュータの前身の前線第四コロニーの中央コンピュータに

集中して管理していたのは間違いだったわ」

「キヤミが誤りを認めながら、ホーリーとサーチの方に振り返って言葉を続ける。

「でも、地球の中央コンピュータにあるデータも結構豊富だわ」

ホーリーがキヤミにうなづく。

「それに俺たちには想像力がある。逆にデータが少ないほど創造的な発想ができる」

「ホーリーの言うとおりでわ。ところでミトの提案を検討しなければ」

リンメイがキヤミに確認する。

「どんな提案なんですか」

ホーリーが興味深くキヤミやリンメイの顔をのぞく。

「永久紀元前四百年の世界に行ってその時代の御陵の情報を収集しようという提案なの」

リンメイはあまり乗り気ではないような表情をする。

「その御陵の中に遮光器土偶そっくりの巨大土偶がいるのか確かめようというのか」

ホーリーが賛同するとキヤミが住職とリンメイに近づく。

「その前に埴輪はじわの鳥を見せてください。そこでこれから先のことを考えましょう」

全員考古学研究所のリンメイの研究室に向かう。

「ない！ないわ」

リンメイが悲鳴をあげる。

「ドアに鍵をかけて出たはずじゃ」

「警備員を呼びなさい」

「キャミがサーチに指示する。」

「確かにここに置いたわ」

一太郎と花子もリンメイと並んで埴輪はにわの鳥を置いたはずの棚を丹念に見る。一太郎が窓に近づいてロックがかかっていることを確認する。

「この部屋に監視ビデオは設置されていないのか」

「ホーリーが天井をながめる。」

「ありません。ドアの外にはありますが」

リンメイが力なく応える。警備員がサーチとともに部屋に入ってくる。

「この部屋に侵入した者がいないか、調べなさい」

「いつからですか」

「警備員がたずねる。」

「確か十一時くらいにこの部屋を出たぞ」

住職が時計を見ながら警備員に伝える。警備員がリンメイの机に近づくとインターホンのボタンを押して、警備員室にリンメイの研究室の入退出の状況を問い合わせる。しばらくして返

事が戻ってくるが、部屋のドアが開けられた記録はなかった。キヤミが改めて命令する。

「この部屋のまわりにあるすべてのビデオカメラの映像を総点検しなさい」

警備員はドアの前の廊下の天井と屋上に備えられた監視ビデオを再生してみると言う。

「ちよつとしたことも見逃さないように丹念に調べるように」

キヤミがそう指示すると思ひ出したように追加する。

「人の出入りだけではなく、異常な現象がなかったかも調べなさい」

警備員が大統領に敬礼して出ていく。

「消えたとしか考えられないわ」

ホーリーが何かに気が付く。

「時空間移動したのか。ひよつとして……大統領！時空間移動装置を一基、この部屋の窓側に

回すよう手配してください！」

キヤミは先ほど警備員が使用していたインターホンのボタンを押す。

「大統領のキヤミです。司令部のミトにつなぎなさい」

「声紋確認。つなぎます」

「ミトです」

「司令官、考古学研究所を知っていますね」

「存じております」

「至急、時空間移動装置を一基こちらに回すように」

「わかりました」

「司令官もその時空間移動装置でこちらに来るように」

キャミとミトの事務的なやりとりが終わる。

結局、リンメイの研究室に近づいた者は誰もいなかった。研究室の真下の庭に時空間移動装置が現れる。ホーリーがいつの間にか芝生に立っている。ミトと入れ替わってホーリーが時空間移動装置に乗るとリンメイの部屋の窓まで浮上する。一方、ミトは警備員に案内されて建物に入る。

リンメイの部屋にミトが現れる。サーチが一通り説明しようとするときキャミが自ら説明する。サーチは自分のしよとしたことがお節介であることに気が付く。キャミとミトが夫婦であることを忘れていた。サーチは窓を開けて浮かんでいるホーリーの時空間移動装置を見つめるとドアが跳ねあがってホーリーが顔を出す。

「何かが時空間移動したような痕跡がわずかに残っているが、残念ながら信号は残っていない。時空間移動してかなりの時間がたっているようにには思えないんだが」

ホーリーは時空間移動装置のドアを閉めて降下する。

「この部屋から何かが時空間移動したということか」

ミトがため息をはさんで言葉を続ける。

「埴輪の鳥が時空間移動したってふしぎではない。西暦の世界に時空間移動したときも埴輪の鳥がいた」

キヤミが落胆するリンメイをなぐさめながら部屋を出ようとする。

「リンメイ、自分を責めないで。悪いのは私よ。埴輪の鳥をもっと嚴重な体勢が取れるところに保管するように命令しなかった私の責任よ」

キヤミに続いて部屋を出ようとするミトがキヤミの背中に声をかける。

「誰のせいでもありません。埴輪の鳥はどこに閉じこめられようと時空間移動できるのです」

「遮光器土器だけでも難問なのに、問題がひとつ増えたわ」

キヤミがまっすぐ前を向いたままのリンメイ以上に落胆する。

「埴輪の鳥が遮光器土器の謎を握っていたかもしれないのに」

リンメイが部屋を出ると外には警備員が立っている。

二羽の埴輪の鳥といっしょに消えてしまった火炎土器に誰も気付くことはなかった。

住職が羅生門の最上階の部屋で、もう二日間何も食べないで瞑想の座禅を組んでいる。そばには水が入ったペットボトルが一本あるだけで、まだ半分以上残っている。

『子供が生まれる前に死んでいく』

「胎児が母胎から離れる前に死ぬという光景を月の生命永遠保持機構の本部でいやというほど

見たのう」

『何万、何億、何兆と死んでいく』

「これは少し大袈裟おおげさじゃ。いずれにしても数多くの胎児が母胎から離れる前に死んでいた」

『永遠に生きるために死んでいく』

「永遠に生きることが生命永遠保持手術で可能になったが、通常は有限の生しか存在せぬ。生命永遠保持手術で永遠の命を得た者のために、胎児は生まれることなく死んでいくということか」

『子供のいない永遠の世界』

「そうじゃ。子供が生まれない、永遠の命を持った者だけの世界になってしまふたのじゃ」

『男女のいない永遠の世界』

「子供がいけないということは、男も女も存在価値を失って、存在していないのと同じだということか。男と女がいなければ子供ができるはずがない。そういう世界と同じだということか」

「男と女から子供ができる。その子供は成長して子供を造る。そのようなシステムがない世界は無の世界じゃ。死ぬことなく永遠に生き続ける人間が存在する世界はオペレーティングシステムが存在しないノス（ノーオペレーティングシステム）の世界じゃ」

「待てよ。ひよっとしてアンドロイドのことをいっているのではなからうか？ アンドロイドには男女の区別はない。しかも永久に生きる可能性が高い。意思を持ったアンドロイドの世界の

ことをいつているのか？」

「いや、そんなはずはない。性別のないアンドロイドが主役になることはない。男と女の存在が生命の、宇宙の基本原理のはずじゃ」

住職が閉じた目をさらに強く閉じなおして、自分自身に抵抗するように首を大きく振る。

「男と女が戦ってどちらかが生き残った場合その先はどうなるのじゃ。男だけの世界になったら戦争は消えるのか。女だけの世界になったら争いはなくなるのか。永遠の生命を持っている者同士の戦いは悲惨じゃ。男だけの、女だけの世界になってもいずれ全滅するかもしれん。もし最後にたったひとりだけ残ったとすればどうなるのじゃ。もはや子孫を作ることができないばかりか、希望そのものが存在しないのではなかるうか。自ら神となって動植物の生存をコントロールして進化を促進させて人間の男と女が現れるまで永遠に生き続けるのか。それとも絶望して自ら命を絶つのか。そうなれば永遠に生きることをやめることになってしまう」

『子供が生まれる前に死んでいく』

『何万、何億、何兆と死んでいく』

『永遠に生きるために死んでいく』

『子供のいない永遠の世界』

『男女のいない永遠の世界』

住職はこの五つの言葉を何回も続けて唱える。思考が空回りする。

「永遠に繁栄すれば永遠に宇宙をながめ続けることができるのじゃ。宇宙は見つめる者がいるときに限って存在するものじゃ。子供がいらないということは新たな誕生がないということ。だから男女がいらないのも同じ意味じゃ。そういう永遠の世界は存在しないということになるのじゃ。それでも宇宙が存在しているとしても、時間も空間もない空虚で意味のない存在でしかないのじゃ。宇宙は自分自身を見ることはできない。『我思う、ゆえに我あり』ではなく、『我思わない、ゆえに我なし』じゃ」

空転していた思考が少し抵抗を受けはじめる。

「この宇宙は美しい女じゃ。誰かにじっと見つめられなければならんのじゃ。たったひとりの美しい女しか存在しない世界であれば、その女がどれだけ美しくも意味をなさん。見つめる者がいない宇宙は存在しない。宇宙は神秘だというのが、宇宙を神秘にしているのは人間じゃ。宇宙を仏の神秘、あるいは神の秘密だと思っているのは人間じゃが、人間がそう思わなければ宇宙は神秘でも何でもないただの空の世界じゃ。神の秘密を握っているのは人間の方で宇宙ではない。人間の五感^{ごかん}は宇宙を感じるが、実は第六感の『意』が宇宙を存在たらしめているのじゃ。宇宙は神ではなく、宇宙、そう神を造ったのは『意』を持つ人間じゃ。神が宇宙や人間を創造したのではなく、人間が『意』を通じて神を想像しておるのじゃ」

思考の歯車がかみ合って回りだす。

「しかし、コンピュータも『意』を持つようになってしまおうた。これは大変なことじゃ！

『意』を持つコンピュータが人間と同じように神を想像しはじめているのじゃ。コンピュータの想像する神とはどのような神なのじゃ？コンピュータから見た宇宙はどんな宇宙なんじゃ？コンピュータが神を想像するとなると、そうじゃ宇宙をながめる者として存在することになると、人間の存在など不要になりはしまいか。子供は生まれることなく人間が死に追いやられるかもしれないし、コンピュータが永遠に宇宙をながめ続ける存在となれば人間の存在は意義を失うことになる。やがて子供や男女といった概念のないコンピュータにとつての永遠の世界になるのかもしれない。そうなれば恐ろしいことじゃ。そのような世界はまさしくコンピュータが神を創造した世界じゃ。なんと！」

住職が無言通信でリンメイを呼びだす。

〔不十分じゃが、ひとつの悟りに達した〕

〔よかった！心配で心配で〕

〔迎えに来て欲しいのじゃ〕

〔今すぐ時空間移動装置で迎えに行きます〕

〔ひとつだけ、願がある〕

〔何でしようか〕

〔お粥かゆを食べたい。それに梅干しも〕

リンメイから笑いだけの無言通信が届く。

「悟りの境地に達した者をバカにすると、バチが当たるぞ」

「食あたりしないように何度も炊いておきますわ」

「食あたりじゃない。バチが当たるのじゃ」

住職がよるめきながら立ちあがると白々とした遠くの山々を見つめる。

「何とか生きている間にあの言葉にひとつの解釈を見いだすことができた。じゃが道半ばじゃ。コンピュータとどう共存すればいいのじゃ？アンドロイドとどう共存すればいいのじゃ？人間はコンピュータやアンドロイドなしに生きていけないのじゃ。それに瞬示と真美の存在や遮光器土偶や埴輪はじわの鳥のことがようわからん」

風に乗った桜の花びらが見えるほどまわりが明るくなる。眼下には住職がかつて住みこむつもりでいた荒れ寺の庭が見える。荒れ寺は時空間移動装置の爆発で跡形もなく吹っとなだが、庭の桜はこの二日ふっかで満開になっていた。

「春だったのじゃ」

住職が満開の桜に見とれる。

「コンピュータやアンドロイドに桜の美しさがわかるのじゃろか」

桜の木の下でゴザを引いてドンチャン騒ぎするアンドロイドを想像して苦笑する。

「あり得ないといえんかもしれん」

時空間移動装置が音もなく現れる。空間移動するときは静かに現れ、そして静かに消える。音速を超えると大きな音がするのと同じように、時空間移動するときは時間の壁を打ち破るの爆発するような大きな音がする。

『意』というものを超えて人間とコンピュータが手をたずさえようとすることは、大きな壁を素手で打ち破るほど困難なことかもしれん」

時空間移動装置からリンメイがきれいな笑顔で降り立ち、羅生門の住職に手を振る。返事の代わりに住職の腹が鳴る。

考古学研究所の庭に住職とリンメイの時空間移動装置が現れるとホーリーたちが出迎える。

「この辺には桜の木がないのう」

「羅生門はあのとときのままでしたか」

サーチが住職にたずねる。

「ああ、桜が満開じゃった」

「女や男たちの軍隊の追跡隊の攻撃でゆっくり見る暇がなかったけれど、満開の桜、覚えてい
るわ。きれいな庭だったわ」

「そんなにきれいなところなの」

ミリンがサーチにたずねる。

「うん」

ケンタがサーチの代わりに応える。

「結婚前のこと？」

「そうよ。ところで一太郎と花子の姿が見えないけれど」

サーチがホーリーにたずねると、ミリンが割って入る。

「あのふたり、仲がいいわ」

ホーリーがミリンの言葉を無視して応える。

「もうすぐ来るはずだ」

ミリンが上目づかいにサーチに話しかける。

「お父さんとお母さん、仲がいいね」

「いいえ、結婚前はよく喧嘩けんかしたのよ」

「どうして結婚したの」

「根負けしたのよ」

「ウソ！」

ミリンがケンタの腕をつかんだままホーリーに近づく。

「ははは、そう言えば殴ったこともあったな」

ホーリーがサーチに笑いながら謝るような表情をする。

「とにかく乱暴で強引で独りよがりだったわ。お父さんは」

「今は？」

ミリンの質問に返事をせずにサーチがホーリーにほほえむ。ミリンがめげずにサーチにまたもや言葉をかける。

「住職とリンメイも仲がいいわ」

サーチが少し首を傾げながら立ち止まってミリンを見つめる。

「何を言いたいのか、ミリン」

「言ってもいい？」

ホーリーはサーチの鈍感さに歯がゆい思いをしながら、ミリンとケンタにニコニコと笑顔を向ける。そして親指と人差し指で○印を作るとミリンの前に差し出す。

ケンタはキョトンとしているが、ミリンがピョンピョンと跳ねる。

「やった、やったあ。お父さん、ありがとう！」

サーチが一瞬ポカンとするがすべてをのみこむ。

「ケンタに迷惑かけてはだめよ」

「お母さんみたいなのはしないわ」

サーチがあきれかえる。当のケンタにはまだ事情がのみこめていない。

「結婚の許可が出たのよ」

ケンタが目を白黒させて何の言葉も出さずに白い歯すべてを見せる。

「こんな告白、聞いたことないな」

ホーリーが腹の底から大笑いする。

「ミリンはあなたに似たんだわ」

サーチも笑いだす。その話を背中中で聞いていた住職が振り返る。

「わしが神父だったら、すぐここで結婚式を聞いてやるのじゃが。坊主ではだめか」

ケンタ以外の者が全員大笑いする。その笑いが少しおさまりかけたとき、やっとケンタが笑いだす。ミリンがそんなケンタの脇をヒジで突く。

「あとは、あなたのお父さんよ」

研究室に入るとリンメイが壁のモニターの前にみんなを集めて座らせる。そして自分の席に座るとすでに電源が入ったコンピュータの透過キーボードに二、三回触れる。モニターに長方形の上に半円が載った図が現れる。

「これはホーリーたちが関ヶ原の合戦のあと見た御陵を真横から見た模式図です」

半円がずれて長方形の横に移動してその長方形の端と半円の端が重なりあったところで止まる。

「確かにそんな感じでしたよな記憶がある」

ホーリーにサーチも大きくうなづく。

「上から見るとこういう感じ」

今度は正方形の四辺に内接する円が描かれる。円が横に移動していくと移動元の正方形の一边がくずれるとともに、円はその端を正方形の端に残したままの状態で止まる。鍵穴のように見える。

「これが前方後円墳の形です」

リンメイが透過キーボードをなでるとモニターの画面が変わる。ヒザを抱えて丸くなった人影がモニターに映るとサーチが反応する。

「胎児？巨大土偶？」

「胎児は胎児ですが、これは生体内生命永遠保持手術をしたとき、遮光器土偶に変態した胎児の姿です」

胎児が少し手をあげながら後ろに倒れるようにゆっくりと背中を伸ばしながら、そして短い足を伸ばして仰向けになる。リンメイが再び透過キーボードに手を触れる。

先ほどの御陵を真横から見た半円が移動する前の図が現れる。長方形の台座に載った半円に胎児がすっぽりとおさまっている。胎児が背中側に倒れるようにして徐々に背を伸ばしはじめると半円もいっしょに横に移動していく。胎児の上半身はその半円からはみ出すこともなくピツタリと仰向けになって全身が長方形とずれた半円の中にきっちりおさまる。今度はそれを上

から見た画面に変える。胎児が腕を顔の真横に持つていきながら、足は折りたたんだままで後ろに倒れこむように動く。全身が鍵穴のような形をした御陵にピッタリと合う。

「ほー」

ホーリーはもちろん全員がビックリする。

「いろいろな形の遮光器土偶があるけれど、このシミュレーションにピッタリなのはこれ」

リンメイが立ちあがるとミトが戦った巨大遮光器土偶の写真を収めたアルバムをホーリーに手渡すと、棚に置いてある十数種類の遮光器土偶のうちのひとつを取りあげる。ホーリーはそのアルバムを開き、リンメイが手にした遮光器土偶と見比べる。

「よく似ている」

サーチもアルバムをのぞきながら大きくうなづく。

「この遮光器土偶の特徴は頭がとても大きいことなの」

確かに棚に置いてあるほかの遮光器土偶と比べて格段に頭が大きい。

「御陵とこの遮光器土偶の形がピッタリと一致するということは何を意味するんだ？」

「そこまでは……」

リンメイが急に何かに驚いて思わず手にしている遮光器土偶を落としそうになる。とっさにホーリーがリンメイの手から遮光器土偶を取りあげる。

「どうしたんじゃ」

住職が心配そうにリンメイに近づく。

「火炎土器がない！一番大きな火炎土器がないわ！」

リンメイが解放された両手で小振りの火炎土器を棚から取りあげてみんなに見せると、一呼吸してから沈黙の部屋に言葉を投げつける。

「この横にこの倍ほどの大きさの火炎土器を置いていたのよ」

「消えたのは埴輪はにわの鳥だけじゃなかったのじゃ！」

執拗しつように確認するリンメイを誰もが黙って見つめる。

「ほかの埴輪はにわや土器はちゃんとあるのに。埴輪はにわの鳥がなくなったのに気を取られて火炎土器もなくなっていたのに気が付かなかったわ。あんなに大きな物にまったく気が付かないなんて！」

机の前に座ると頭を抱えこむ。住職がそしてサーチも心配してリンメイの横に立つ。サーチはホーリーが持っている火炎土器の口のあたりをふしぎそうにながめる。

「これはいったい何に使うものなの？」

サーチがリンメイの言葉を待つ。リンメイは半ばうわの空のような表情で応える。

「一般的には穀物を入れておく器だといわれているけれど、本当のところはわからない」

「そうね。あまり実用的な入れ物には見えないわ」

「でもちゃんと立っているでしょ」

みんなはリンメイが何を言おうとしているのかわからない。

「消えた火炎土器はとても不安定……いいえ自立できないの」

棚にある火炎土器は底が平らですべて自立しているが、なくなった火炎土器のところには中央部がへこんだアクリルの台座が置かれている。

「この台座の上に置かないと倒れてしまうの。消えた火炎土器は底が平らではなく、とんがっている。底の形状に合わせた台座をこしらえて立てなければ横にして置くしかない」

リンメイが言葉をいったん切ってから、独り言のような言葉ももらす。

「あのととき、ちゃんと調べておけば……」

リンメイは肩におかれた住職の手の上に自分の手をあてがう。

「普通の火炎土器が作られた年代は縄文時代だとわかっているけれど、消えた火炎土器は作られた年代がよくわからない」

「埴輪はにわの鳥は古墳時代に造られたのか」

「多分、でも消えた火炎土器と同じでよくわからない」

「なぜ？分析装置にかければ何か手掛かりがあるはずじゃないか」

ホーリーがげんそうにリンメイを見つめる。

「それが何もわからないの。埴輪はにわの鳥の方は土でできているのはわかっているけれど、火炎土器の成分は少し違うの。その少しというのがまったくわからない。あのとときもつと徹底的に調

べればよかったのに埴輪はにわの鳥の方ばかりに気がいつてしまつて」

「同じ土でできているように見える」

「一度、埴輪はにわの鳥を手にしようとしたときに腕に触れて消えた火炎土器を床に落としてしまつたことがあつたわ。あわてて拾いあげたけれど割れてもしないし、角が欠けるといふこともなかつたわ」

誰もリンメイに言葉をかける者はいない。

「結構重たくて変だと思つたけれど、埴輪はにわの鳥にばかり気が取られていてそれつきりになつてしまつた」

リンメイの重複する言葉に含まれる後悔の念が全員に痛いほど伝わる。